

# 箸の「伝統型」の持ち方習得のための 指導方法と中学校生徒の反応

宇都宮通子\*・五島 淑子

How to Teach the Traditional Way to Hold and Use Chopsticks  
and the Response of the Junior High School Students

UTSUNOMIYA Michiko\* and GOTO Yoshiko

(Received January 15, 2009)

キーワード：中学生、箸の持ち方・使い方、伝統型

## はじめに

1歳児から5歳児の箸の持ち方・使い方の実態調査の結果<sup>1)</sup>から、「伝統型の箸の持ち方・使い方」の習得には、習得しようとする人の「伝統型」の持ち方に対する正しい知識、「伝統型」の持ち方の性質に対する正しい理解やプラスの意識、保育者・指導者による継続的な指導や支援が必要であることがわかった。

つまり、環境として、箸の習得過程に、正しい知識を与えてくれる指導に出会えるか否かは、箸の持ち方・使い方の型に大きな影響を与えるといえる。

「箸の持ち方・使い方」を日本の食法の文化として、各自が習得したうえで、次世代へ伝達していこうとすることは、目的意識をもって生活課題に取り組む「技術・家庭（家庭分野）」の目標と一致する。

また、現行の「技術・家庭（家庭分野）」では、「A生活の自立と衣食住」と「B家族と家庭生活」の2領域の学習内容を関連づけて学習することで、よりよい生活の実践にむけて課題をもって生活をよりよくしようとする能力と態度を育てることをねらいとしている。

そこで本研究では、箸に関する正しい知識と技術の習得を目指しつつ、中学校家庭科のねらいを達成する「箸に関する学習」を計画し、実践した。その学習指導と効果の検証については、学習者が記入した自己評価表の分析と質問紙法による調査を行い、各題材学習前後の「箸の持ち方・使い方」の型や意識の変化、学習指導要領のねらいに対する重要度の変化を確認した。

## 1. 調査の目的・方法

---

\*防府市立華陽中学校

### 1-1 目的

「箸に関する学習」の実践を行い、授業中の生徒の反応や授業後の感想、学習前後の調査結果から、指導方法と学習効果を検討し、題材設定の有効性を確かめることである。

### 1-2 方法

「箸に関する学習」の授業実践（総時数7時間）を行い、生徒の反応を観察した。箸学習記録カード（自己評価表）を活用した授業の評価と、質問紙法による学習前後の生徒の意識の変容を分析した。

指導時期は、2007年9月～10月、山口県防府市立K中学校2年生171名（男子73名、女子98名）を対象とした。

学習前後の箸に関する調査の内容は、「箸の持ち方・使い方」の型、「非伝統型」の人の「伝統型」の習得意欲、次世代への「伝統型」伝達意欲、「伝統型」6特性の評価順、「学習指導要領」のねらいへの学習効果である。

### 1-3 指導案

#### 第2学年技術・家庭(家庭分野)学習指導案

授業者： 教諭 宇都宮 通子

#### 題材名 「箸に関する学習」－「伝統型」の持ち方の習得を目指して－ 題材設定の意図

**箸を使って食事をするのは、日本の食文化である**

日本で箸が初めて書物に登場するのは、古事記(712)である。一方、歴史上の出来事としては、遣隋使(小野妹子)が現在の中国の食法を伝えたと言われる。中国の「隋書」には、当時日本では「手食」であったことが記述されており、箸食文化はこのときに、中国から匙と箸を使って食事をする食法が伝えられた可能性が高いようである。その後、鎌倉時代には匙は用いなくなり箸のみを使って食べる日本独自の作法に変化したことが明らかになっている。箸のみを使って食べる食事方法がその後日本料理の調理方法や盛り付けや配膳の仕方を決定づけていったとされ、「箸」は日本の食文化に対して大きな影響を与えたといえる。このことから、日本の食文化である箸使用の歴史や箸の長さ、食事作法、持ち方・使い方についての知識と技術に出合うことは、価値あることである。

**生徒は、「箸」の持ち方・使い方の特性について、学習した経験がない**

本学年の生徒に箸についての調査を行ったところ、全員が毎日箸を使用しているが、「伝統型」を習得している生徒は、60.2%である。「非伝統型」である4割弱の生徒のうち、半数以上は「伝統型」を習得したいと考えていた。「非伝統型」の人で「伝統型」を習得したいという意欲をもつ人の比率は、中学生期以降に低下していくことが明らかであることから、中学生期に「伝統型」の持ち方について正しく学習することは、「非伝統型」の人にとって、「伝統型」の持ち方を習得する機会となる。また、すでに、「伝統型」の持ち方をしている人にとっては、自分が習慣化させている「箸の持ち方・使い方」は伝統的に、意図的に受け継がれている方法であり、機能性や社会性などの優れた特性があることを知る機会とな

る。このことから、「箸に関する学習」をすることは、適時性や汎用性があると考ええる。

「箸に関する知識」を素地とし「伝統型」の持ち方の習得意欲を高め、日本の食文化として次世代に伝達しようとする態度を育てたい

「箸の持ち方・使い方」はこれまで家庭中心に伝達されてきたが、「箸の持ち方・使い方」以外の、箸にまつわる知識は伝達されていない。これは、同中学校の他学年の生徒のデータから得た。箸にまつわる知識は、「伝統型」の習得にとって学習の素地となる。そこで、世界の中の日本として、食法や箸の形、箸の持ち方・使い方、食事マナーなどの未知の知識を習得させた上で、「伝統型」の技術を提示することによって、「伝統型」の持ち方に対する習得意欲が高まると考えた。「伝統型」について理解したり、習得したりすることによって、日本の食文化の1つとして、「伝統型」の持ち方を次世代に伝達しようとする意欲を高めたい。

### 指導計画（総時数 7時間）

- (1) 世界の食法と箸食文化について知ろう・・・・・・・・・・ 1時間
- (2) マイ箸が、地球に優しいわけを知ろう・・・・・・・・・・ 1時間
- (3) マイ箸を作ろう・・・・・・・・・・ 2時間
- (4) 箸の「伝統型」の持ち方・使い方と特性を知ろう・・・・・・ 1時間
- (5) もてなしの心に礼儀でこたえる食事マナーを知ろう・・・・ 1時間
- (6) 箸学習のまとめ・・・・・・・・・・ 1時間

### 1-3-1 小題材の学習過程・評価計画

時	小題材名	学 習 内 容	学習指導要領 ねらいとの関連	評 価
(1)	世界の食法と箸食文化について知ろう  【文化性】	①世界の食法 「箸食文化」、「ナイフ・フォーク・スプーン食」、「手食」の分布と全人口に占める割合 ②「箸」のおもな材料 日本、韓国、中国の箸の材料比較 ③日本の箸文化の歴史 「古事記（712）」（須佐之男命の八岐大蛇退治の紙芝居） 「隋書」倭国伝より（遣隋使（608）帰国時の日本の様子の紹介） 食具の変化 ④日本の箸の長さ 手の長さ×1.2または、1アタ×1.5 ⑤手の大きさの測定とマイ箸の長さ 手形とり（1アタ・掌の長さ）	A（6） 我が国の文化	【関・意・態】 自己評価 【技能】 プリント 【知識理解】 テスト
(2)	マイ箸が、地球に優しいわけを知ろう	①マイ箸運動と環境の関連 地球温暖化のメカニズムの確認、森林の果たす役割とマイ箸の関連づけ ②箸の形 日本、韓国、中国の箸の形比較 江戸木箸の特徴 先細で、小さいものがつまみやすい ③箸の製作 プロセス1 けがき	B（4） 地球環境問題  A（6） 我が国の文化	【関・意・態】 自己評価 【知識理解】 テスト



		<審美性> 美しさ、自信 <文化性> 日本の伝統的食具の使用 ⑦生活習慣の確立 幼児期の生活習慣の確立 ⑧次世代への伝達	B (2) 基本的な生活習慣 A (6) 我が国の文化	
(5)	もてなしの心に 礼儀でこたえる 食事マナーを 知ろう  <b>【社会性】</b>	①マナーの必要性 食事場面からの経験 場面1 接待 場面2 共食 ②VTR「楽しい食事のマナー」の視聴 (東京図書、25分) ③食事マナー(教育図書) 配膳の仕方、箸の取り上げ方・置き方、嫌 い箸の確認と練習	A (5) 食事マナー  A (6) 我が国の文化	<b>【関・意・態】</b> 自己評価 感想 <b>【知識】</b> テスト
(6)	箸学習のまとめ  <b>【機能的】</b> <b>【安全性】</b> <b>【応用性】</b> <b>【社会性】</b> <b>【審美性】</b> <b>【文化性】</b> の実践	①りんかけ豆づくり 調理道具として、箸を用い、安全に気をつ けながら、りんかけ豆を作る。 ②調理用具等の片付け ③接待の心がけ 紙皿(懐紙風)の上に、りんかけ豆 20 粒程 度・マシュマロ1個・のり1枚を乗せる ④共食の心がけ 食事作法、箸の取り上げ方・置き方 ⑤「伝統型」の持ち方でいただく 実践1 マシュマロを箸で1/2に切って口 まで運ぶ 実践2 1/2 のマシュマロをのりで巻い て食べる 実践3 りんかけ豆を食べる	A (5) 我が国の文化  A (5) 食事マナー  A (5) 食事マナー A (5) 食事マナー	<b>【関・意・態】</b> 自己評価 観察

## 2. 生徒の変容

### 2-1 自己評価

#### 2-1-1 箸学習記録カード

1時間目から6時間目までの各学習時間の前と後に、学習項目ごとに「興味関心」「知識理解」「学習への期待(意欲)」について、自己評価させた。

評価基準は、生徒が通常評価したりされたりすることに慣れている「5・4・3・2・1」の5段階尺度を用いた。尺度は、学習者に「5高い 4やや高い 3ふつう 2やや低い 1低い」と説明し、5つの選択肢の中から、1つ選択させた。なお、7時間目は、「箸の持ち方・使い方」の学習の総合実践なので、自己評価表には、記入させなかった。

自己評価表を、写真1に示した。自己評価表は、題材学習中すべてを1枚に記入できるようにし、学習項目を時系列で示し、生徒に学習の流れが想起しやすいようにした。記入の際には、学習前には「青色」、学習後は「赤色」を用いるよう指示した。さらに、生徒が記入した自己評価表を用い、1～5段階の点をそのまま点数化し、授業の前後で対応のある t 検定に用いた。

『中学校新教育課程の解説 技術・家庭』<sup>2)</sup>には、A(5)の指導上の留意事項として、「生活経験や家庭生活によって、興味・関心や意欲、知識、技術などが異なっているからを考慮し、一人一人の実態を的確に把握しながら、主体的な学習が進められるよう配慮する。そのために、例えば、学習カードや学習カルテなどを活用することが考えられる。」としていることから、この自己評価表を用いることによって、学習者に学習項目の全体像や流れを確認することや学習によって起こる自己の内面の変化を視覚的に確認させることができるのではないかと考えた。



写真1 自己評価表

### 2-1-2 自己評価表の集計結果

自己評価表を用いて、項目ごとの学習前後の「興味関心」「知識理解」「学習者への期待(意欲)」の平均値についてt検定を行った。結果を表1に示した。

表1 項目ごとの学習前後の自己評価(対応のあるt検定)

調査項目	調査時期	興味関心		知識理解		学習への期待(意欲)	
		平均値	有意確率	平均値	有意確率	平均値	有意確率
世界の食法	学習前	2.9	p<0.001	2.8	p<0.001	3.0	p<0.001
	学習後	3.4		3.4		3.5	
日本の箸の歴史	学習前	2.9	p<0.001	2.8	p<0.001	2.9	p<0.001
	学習後	3.4		3.4		3.4	
適当な箸の長さ	学習前	2.9	p<0.001	2.8	p<0.001	3.0	p<0.001
	学習後	3.3		3.2		3.4	
地球温暖化とマイ箸	学習前	3.0	p<0.001	3.1	p<0.001	3.1	p<0.001
	学習後	3.8		3.8		3.5	
箸の形の特徴	学習前	3.8	n. s	3.3	p<0.001	3.5	n. s
	学習後	4.9		3.8		3.0	
マイ箸の製作	学習前	3.6	p<0.001	2.8	p<0.001	3.6	p<0.001
	学習後	4.2		3.9		3.0	
箸袋の製作	学習前	3.1	p<0.001	3.5	p<0.001	3.5	p<0.001
	学習後	3.5		4.0		3.9	
箸の機能	学習前	3.2	p<0.001	3.0	p<0.001	3.1	p<0.001
	学習後	3.8		3.8		3.6	
箸の持ち方	学習前	3.2	p<0.001	3.2	p<0.001	3.2	p<0.001
	学習後	3.8		3.8		3.6	
箸の練習法	学習前	3.2	p<0.001	3.0	p<0.001	3.2	p<0.001
	学習後	3.7		3.8		3.6	
「伝統型」の魅力	学習前	3.2	p<0.001	3.0	p<0.001	3.1	p<0.001
	学習後	3.8		3.7		3.6	
食事マナーの意義	学習前	3.2	p<0.001	3.0	p<0.001	3.2	p<0.001
	学習後	3.8		3.9		3.7	
食事マナーの方法	学習前	3.2	p<0.001	3.0	p<0.001	3.1	p<0.001
	学習後	3.7		3.8		3.7	

### 2-1-3 自己評価表の考察

箸学習記録カードでは、学習項目ごとに記録させたが、「世界の食法と箸食文化について知ろう」「マイ箸が、地球に優しいわけを知ろう」「マイ箸の製作をしよう」「箸の「伝統型」の持ち方・使い方と性質を知ろう」「食事のマナー もてなしの心に礼儀でこたえよう」（5つの小題材を以下、「箸食文化」「地球環境とマイ箸」「箸の製作」「伝統型の持ち方」「食事マナー」とする）の小題材ごとに合算し、比較を行った。

#### ① 「興味関心」

学習前後の「興味関心」の結果を図1に示した。

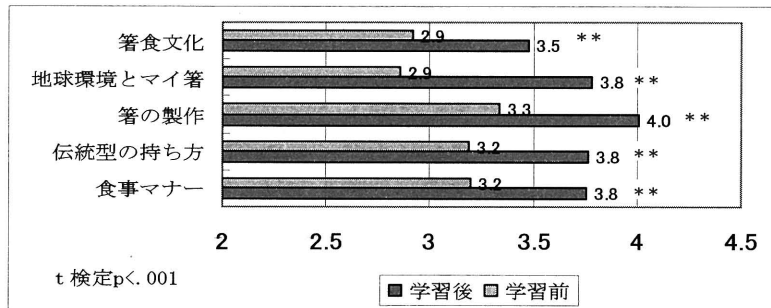


図1 「箸に関する学習」前後の「興味関心」の程度

図に示した小題材は、実践した順に上から並べた。自己評価表を5段階尺度で記入させたので、「ふつう」は3となる。

学習前は、「箸食文化」「地球環境とマイ箸」で、3未満であった。このことから、「箸に関する学習」の題材の導入は、「興味関心」が低かったと考えられる。しかし、「箸の製作」「伝統型の持ち方」「食事マナー」は、学習前から3を超えた。「箸の製作」が、興味関心が高く、製作した箸を使って学習を行った「伝統型の持ち方」と「食事マナー」の「興味関心」は、3以上を維持した可能性がある。

学習後は、どの小題材も学習前より高い値を示した。学習によって、「興味関心」が高まったと考えられる。学習後に最も「興味関心」が高かったのが、「箸の製作」で、あった。「箸の製作」は、マイ箸の製作と箸袋の製作という製作が中心の小題材で、作品を作ることは、学習者の興味関心を高めることがわかった。

学習前後で差が最も大きかったのは、「地球環境とマイ箸」であった。地球環境問題について、学習者はこれまで学習したことがなく、関心の低い状態であったことがわかった。「地球環境とマイ箸」の小題材の学習によって、はじめて地球温暖化の実態やメカニズムを知識として学習したことによって、学習者の「興味関心」が高められたことがわかった。学習前後で最も差が大きかった小題材が、「地球環境とマイ箸」であったことは、授業者にとって思いがけない結果であった。

学習前後の「興味関心」について、対応のあるt検定を行った結果、すべての項目で有意に差が認められた。

## ② 「知識理解」

学習前後の「知識理解」の結果を図2に示した。

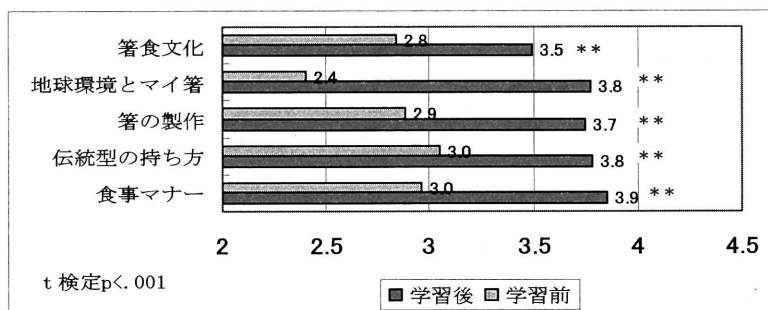


図2 「箸に関する学習」前後の「知識理解」の程度

学習前は、「伝統型の持ち方」を除き、3以下であった。しかし、3に近い項目が多かった。これは、家庭科の学習内容が、毎日の生活の中で実践していることが中心であることから、学習前から生活に支障がない程度の知識をもっているという意識が、学習者の中にあるからであろうと考えられた。

「伝統型の持ち方」が、平均値より高かった理由として、自分の箸の持ち方が、「伝統型」の人は、すでに「伝統型」の持ち方を知っているからであると考えられた。最も低かった「地球環境とマイ箸」は、「興味関心」と同様に、地球環境問題について学習したことがなく、また、地球環境問題と箸が何のかかわりがあるかについて見当もたない状態であったことが考えられた。

学習後は、どの小題材も学習前より高い値を示した。学習によって、「知識理解」が高まったと考えたことがわかった。学習後に最も「知識理解」が高かったのが、「食事マナー」であった。「食事マナー」は、洋食のテーブルマナー、日本の食事作法の形式をビデオに編集されたものを使って学習した。25分間のビデオには、方法や形式がコンパクトにまとめられ、背景もホテルや料亭での食事の様子が映し出されていたので、これまでの生活経験にないことを学習し、知識として得るものが大きかったと考えられた。

学習前後の「知識理解」について、対応のあるt検定を行った結果、すべての項目で有意に差が認められた。

## ③ 「学習への期待（意欲）」

学習前後の「学習への期待（意欲）」の結果を図3に示した。

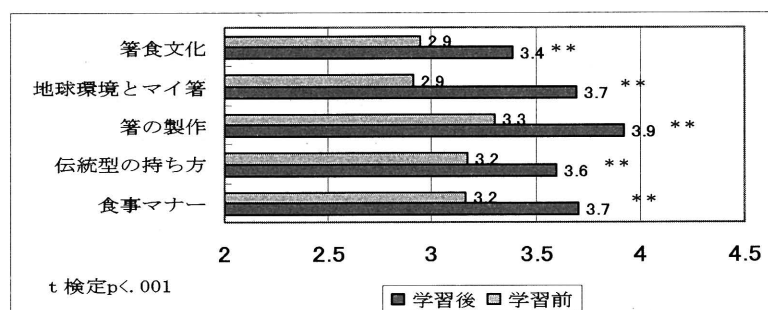


図3 「箸に関する学習」前後の「学習への期待（意欲）」の程度



学習前に「箸食文化」「地球環境とマイ箸」は、3以下であった。題材の学習の導入段階で、「興味関心」が低かったことが、学習への期待感や学習への意欲も低下させていたと考えられた。箸という教材は、日常的で、使用方法が習慣化しているだけに課題意識を感じにくく、それが学習への期待感や意欲の低さにつながっていると考えられた。

「学習への期待（意欲）」が最も高かったのは、「箸の製作」であった。「興味関心」と同様に、「箸の製作」は、学習者の学習意欲を高めた。また、「箸の製作」以降の学習は、自分が製作した箸を使用したことによって、「学習への期待（意欲）」は維持された可能性がある。この点は、「箸に関する学習」を調理室の備品の箸や学校給食で使用する箸など、学習者にとって愛着の湧いていない箸を使用した授業を行っていないので、比較することはできなかった。

学習後に、さらに学習していく意欲が高かったのは、高かった順に「箸の製作」「地球環境とマイ箸」「食事マナー」「伝統型の持ち方」「箸食文化」であった。「箸食文化」の学習以外は、すべて生活実践にかかわる学習項目であったので、学習したことを生活の中で活かしていこうと考えた可能性がある。

学習前後の「学習への期待（意欲）」について、対応のある t 検定を行った結果、すべての項目で有意差があった。

## 2-2 「箸の持ち方・使い方」の実態

### 2-2-1 「箸の持ち方・使い方」の型

学習前と学習後の「伝統型」と「非伝統型」の比率を図4に示した。

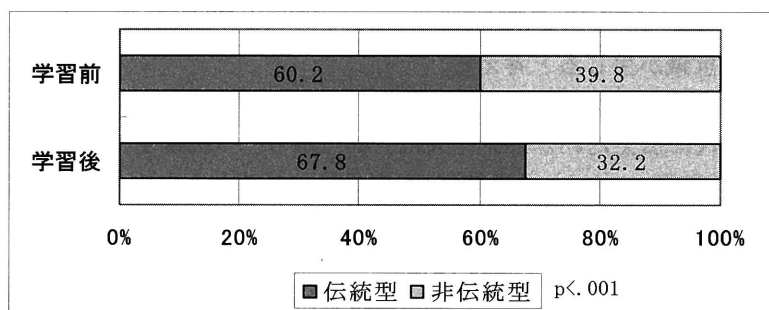


図4 「箸の持ち方・使い方」の型の変化

学習前は、「伝統型」が 60.2%、「非伝統型」が 39.8%、学習後は、「伝統型」が 67.8%、「非伝統型」が 32.2%であった。「箸に関する学習」によって、「伝統型」の人の比率が、7.6%増加した。学習前と学習後で対応のある t 検定を行った結果、有意に差が認められた。

なお、学習者の「箸の持ち方・使い方」は、幼児期から 10 年程度の年月を経て、現在の持ち方に習慣化している。したがって、「箸の持ち方・使い方」の「伝統型」習得を達成目標にした場合、すでに「伝統型」を習得している場合と習得していない場合では大きな差が生じることや、右手中指の動作自由度との関係もあることから、「伝統型」を身につけるのではなく、身につけようとする態度を到達目標とした。

### 2-2-2 「非伝統型」の人の「伝統型」の習得意欲

学習前と学習後の「非伝統型」の人の「伝統型」の習得意欲を図5に示した。

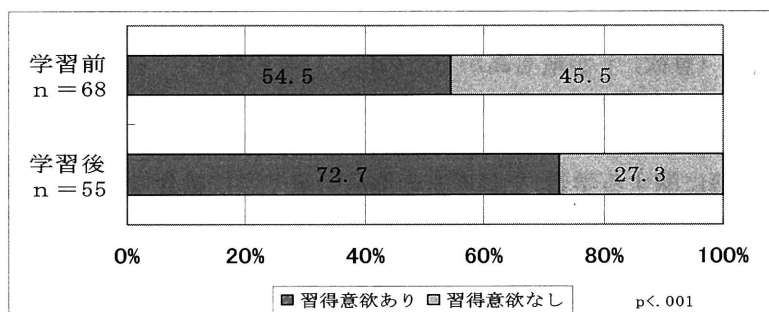


図5 「非伝統型」の人の「伝統型」の習得意欲の変化

学習前に「非伝統型」であった68人のうち、「伝統型」の習得意欲があったのは、37人(54.4%)で、5割以上の人に習得意欲があった。持ち方による内訳は、「鉛筆型」が30人中16人(53.3%)、「その他の型」が38人中21人(55.3%)であった。

「箸に関する学習」の後、非伝統型の人数は55人になったが、そのうち「伝統型」の習得意欲をもつ人の比率は72.7%になり、学習によって、非伝統型の人のうち「伝統型」の習得意欲を持つ人の比率が増加した。

### 2-2-3 「伝統型」の伝達意欲

「伝統型」の持ち方について好意的に評価している場合に、「伝統型」の持ち方を次世代に伝達したいという意識が生じると考える。

学習前と学習後の次世代への伝達意欲を図6に示した。

学習前に、次世代に伝えたいと答えた人は、84.2%いた。「伝統型」の習得者が60.2%であることから、「非伝統型」の人も、「伝統型」を次世代に伝達したいと考え、「伝統型」の持ち方に対して、好意的に感じていることが分かった。

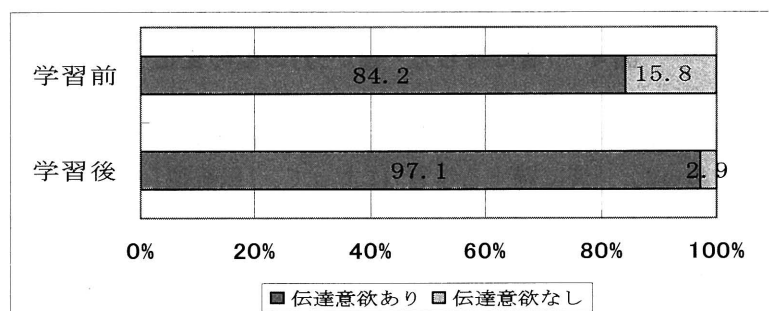


図6 「伝統型」の伝達意欲の変化

学習後は、伝達意欲をもつ人の比率が97.1%になり、「箸に関する学習」によって、次世代への「伝統型」の伝達意欲は増加した。

#### 2-2-4 「伝統型」の持ち方についての評価

箸の「社会性」「審美性」「文化性」「機能性」「安全性」「応用性」の6つの特性を、重要と思う順に、1から6までの数字を記入させた。

回答された順序尺度の1は6点、2は5点、3は4点、4は3点、5は2点、6は1点とし、合計点を算出し、平均値を出した。結果を図7に示した。

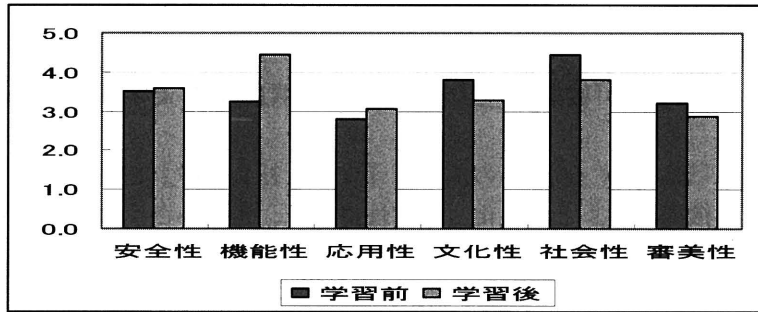


図7 「伝統型」の性質に対する学習者の評価順

伝統型の持ち方について、学習前に学習者は、『社会性 > 文化性 > 安全性 > 機能性 > 審美性 > 応用性』の順に高く評価した。学習後には『機能性 > 社会性 > 安全性 > 文化性 > 応用性 > 審美性』の順に高く評価した。

学習前と学習後を比較すると、評価の順に変化が見られた。学習前より評価の順位が上がったのは、「安全性」「機能性」「応用性」で、下がったのは、「文化性」「社会性」「審美性」であった。これは、重要と思う順序であって、「文化性」「社会性」「審美性」の評価が下がったわけではない。学習前には、評価が低かった「機能性」「安全性」「応用性」について、箸の役目や機能を正しく理解したことによって「機能性」「安全性」「応用性」が得られることが変わったことを示していると考えられる。

学習前と学習後で対応のあるt検定を行った結果、「機能性」「社会性」( $p < 0.001$ )、「文化性」「審美性」( $p < 0.05$ )で有意差があった。

次に、6つの性質のうち、「安全性」「機能性」「応用性」を『機能性群』、「文化性」「社会性」「審美性」を『文化・社会性群』として、それぞれ3つずつの性質の順位得点を合算した。

『機能性群』と『文化・社会性群』の学習前と学習後の平均値を算出し、図8に示した。

学習前は、『文化・社会性群』が『機能性群』より高かった。学習後は『機能性群』が『文化・社会性群』群より高くなり、順位が入り代わった。

学習前に『文化・社会性群』と『機能性群』の差は0.6であったが、学習後は、差が0.4となり、『文化・社会性群』と『機能性群』の差は、小さくなった。

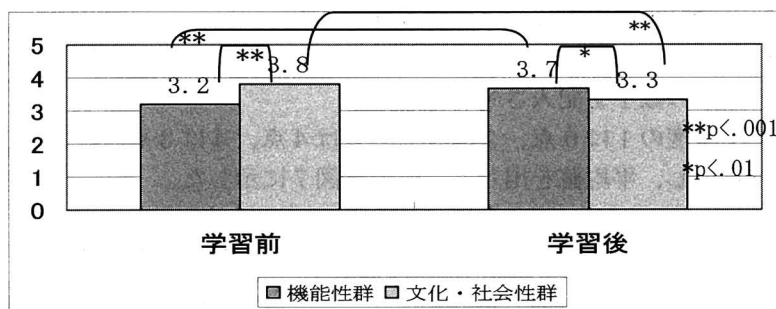


図8 「伝統型」の「機能性群」「文化・社会性群」に対する学習者の評価順

このことから、「箸に関する学習」の前は、『文化・社会性群』を高く評価していたが、学習を通して、『機能性群』と『文化・社会性群』は、差が小さくなり、重要性の均等に近づいた可能性が考えられた。

### 2-3 学習指導要領のねらいへの効果

「箸に関する学習」では、2-1の学習指導案指導過程に示したように、中学校家庭科の学習指導要領のねらいをふまえ、題材を設定した。

そこで、学習指導要領のねらいに対する効果を確認するために、1から6の質問を設定し、その「重要性」について、「そう思う」「少しそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の4段階で回答させた。

学習前の調査は、本来ならば、学習を全くしていない段階で行うことが重要であるが、今回はクラスによって、1時間目または2時間目の学習の後に「学習前」の調査を行うことになった。そのため、学習前の結果が、やや高い値を示している部分があると考えられる。

質問項目1から6を次に示した。

- 1 調理用具の正しい使い方を知って、安全に取り扱うことは、重要とと思いますか。
- 2 楽しい会食のためにマナーを守ることは、重要とと思いますか。
- 3 我が国の文化に関心をもって生活することは、重要とと思いますか。
- 4 用途に応じた道具の製作をし、手作りのよさを感じることは、重要とと思いますか。
- 5 道具の正しい使い方を身につけることは、生活習慣の確立のために重要とと思いますか。
- 6 地球環境への影響を考えながら生活することは、重要とと思いますか。

学習前と学習後の結果を図9に示した。

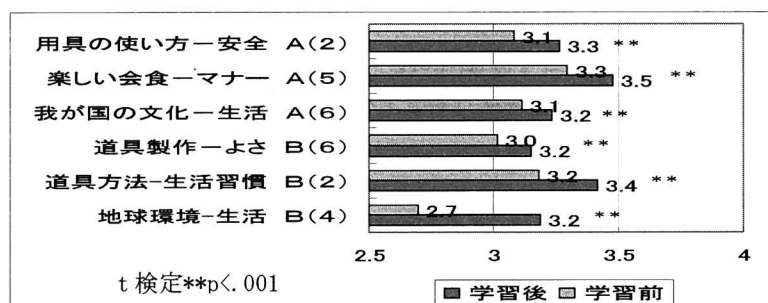


図9 学習指導要領のねらいの「重要性」度

学習前にどの項目も、平均値 2.5 以上はあったので、学習者はどの項目も重要であると考えていた。しかし、重要さの度合いに差が見られ、特に、「マナーに気をつけた食事の仕方」「正しい道具の使い方が安全な調理や生活習慣の獲得につながる」などが高く、「地球環境に配慮した生活の仕方が重要である」が、もっとも低い値であった。

学習後は、すべての項目で「重要性」が有意に高くなった。「マナーに気をつけた食事の仕方」「正しい道具の使い方が安全な調理や生活習慣の獲得につながる」は、学習後も高い値を示した。

学習前後で、最も差が大きかったのは、「地球環境に配慮した生活の仕方」であった。

これらのことから、「箸の持ち方・使い方」を中心にした 7 時間の題材は、学習指導要領 A (2) (5) (6)、B (2) (4) (6) への効果があったと考えられる。

### 3. まとめ

中学校家庭科において、「箸に関する学習」を計画し、実践した。それによって、次のことがわかった。

#### (1) 自己評価表からみた「興味関心」「知識理解」「学習への期待(意欲)」

「自己評価表」から、「箸に関する学習」によって、「興味関心」「知識理解」「学習への期待(意欲)」は、高まった。

特に、「箸の製作・箸袋の製作」は、学習者には興味があり、学習に対する意欲を高めた。また、「マイ箸の製作」は、学習の興味関心や意欲を持続させる効果があったと考えられた。

#### (2) 「箸の持ち方・使い方」の実態の変容

「箸に関する学習」によって、伝統型の比率、非伝統型の人の伝統型の習得意欲、次世代への伝達意欲は高まった。

#### (3) 伝統型の 6 つの特性に対する評価順

学習前は「文化・社会性群」を重視していたが、学習後は「機能性群」を高く評価し、順位が入れ替わった。また、「能性群」と「文化・社会性群」の差が小さくなったことから、「伝統型」の持ち方の性質に対する偏りが、やや是正されたと考えられた。

#### (4) 学習指導要領のねらいに対する効果

学習指導要領 A (2) (5) (6)、B (2) (4) (6) のねらいに対する重要性が増加し、「箸に関する学習」は、A 領域と B 領域の関連を図った学習としての効果が確認できた。

## 引用文献

- 1) 宇都宮通子・五島淑子：「箸の持ち方・使い方」指導のための基礎的研究—1 歳児から 5 歳児の実態と「伝統型」習得のための要点—, 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第 25 号, pp337-351 (2008)
- 2) 中学校学習指導要領(平成 10 年 12 月)解説—技術・家庭—平成 11 年 9 月, 文部科学省